

村田正志編

『古文書鑑—様式と筆蹟—』

岩澤 愿 彦

過日水彩画家大下藤次郎の原画と復成画とを見較べる機会があつて、改めて現代印刷技術の精巧さに驚嘆したが、こういう卓越した技術の恩恵はあながち美術界にのみ限られたわけではあるまい。典籍や書蹟に関する豪華本をはじめ、一般の流布本もまたこの恵みをこうむるところがあろう。古文書を扱った著述などもその一つではあるまいか。

初学者や独修者にとって古文書や古記録の操作ほど取り付きにくいものはないが、それは恐らく原本に接する機会に乏しいためであらう。解説書にどれ程懇切丁寧に説明があろうとも、古文書・古記録そのものを知らなくては理解したい部分があるからである。したがってこの種の入門書では、形状をそのままに示すことのできる良質な写真の有無が、その利用価値に多大の影響を与えている。精巧な写真を十分に利用した入門書を廉価で手に入れることのできる現代の修学者はまことに幸運である。

今回統群書類従完成会から村田正志博士編『古文書鑑—様式と筆蹟—』が刊行された。写真五六点、釈文解説一八頁からなり、従来日本人の手になる最古の白銅鏡とされた隅田八幡宮所蔵古鏡銘文以下明治天皇勅書まで、金石文・古写経・典籍・古記録・古文書の各時代における代表的事例を収めている。内容は高度であるが、一応入門書、教材に属するものと考えてよいであらう。村田博士は永く東京大学史料編纂所に勤務して南北朝時代の編纂を担当し、退官後

は国士館大学・国学院大学において古文書学を講じ、後進を指導するかたわら、文化庁文化財保護審議会専門委員として古文書・古典籍の審議に当っておられる碩学であつて、この種古文書集の編者としてはまさに適任の方である。

さて本書の特色は筆蹟を重視されたところがまず認められる。筆蹟の研究はいわゆる古文書の外的研究に属し、真偽の判定に至る階程となるが、最近の入門書では様式や機能の説明を先にし、筆蹟の例は必ずしも十分ではなかった。

この点文化財審議員として経験豊かな博士が選択の労をとられたことは適切であると共に、博士の学風の反映もあつて、古文書学に対する一つの対応の仕方が窺われる。もつとも筆蹟については『古文書時代鑑』をはじめ各種手鑑『書道全集』『書の日本史』『書と人物』『書蹟大観』などすぐれた刊行物もあるが、それらは皆浩瀚の書である。本書のように簡潔な書にはまたそれなりの長所があり、しかも重複する事例は若干に過ぎない。本書に久我文書・石清水八幡宮文書・五條文書・相楽家所蔵文書・北島文書など博士が学究生活の中で手掛けられたものからも事例を採用しており、そこにおのずから博士ならではの特徴も認められる。また筆蹟を重んじるといっても堂上の文書には偏しないように、賣券や去状など庶民の文書をも交じえ、また内容の豊富なものも提出するなど変化を配慮している。たとえば、源頼朝が幕府を開設してから後も御家人達が頼朝袖判の下文を導んだことを小山朝政の実例で示し(17・18号)、また建治二年の異国征伐計画に対し鎮西武將が勇躍馳せ参じた事例として喧伝された文書は、軍勢武具の注進を要請されたことに対する請文であることを示したり(28号)、藤原定家の子御子左為家が子息二條為氏から所領を悔返して異腹の子冷泉為相に譲ることを定めた置文は、為家の自署部分を除くほかは全て為氏の筆蹟にかかることを指摘されている(26号)。南北朝時代では後醍醐天皇の雄渾な宸翰様(31号)、後光厳天皇の典雅な上代和様(41号)の筆蹟をはじめ、清水寺奉納の足利尊氏自筆願文(33号)、血判文書の初見といわれる菊池武重

自筆誓書(34号)、相築家伝来の北畠親房自筆書状(37号)などを採りあげ、そしてこの時代に特有な料紙である小形切紙について注意を喚起している。小形切紙についてはまま見解の分れる事例もあるが、多くの経験を背景にした本書の発言は注意すべきである。

博士はまた随所にさりげなく自説を開陳している。たとえば藤原佐理の離洛帖(10号)の目下差出書は普通「旅士(草名)」と解説されているが、博士はこれを「旅士頓首」と解説され、この書状における佐理の草名は三個であると指摘している。「旅士」に接続する字の筆画は確かに文中草名の筆画とは異なるように見受けられる。また高野山文書の寛喜二年十二月廿一日付秦員本賣券(21号)は古来離読の文書とされているが、差出人次行の署名を『大日本古文書』等が「秦得重」と解説するのは、関連文書に「嫡子得重」の署名があることに拠っている。しかし寛喜二年賣券の署名部分の字体は博士が「葛木得重」とするのに近い。それから鶴岡八幡宮所蔵の足利持氏血書願文(45号)は願文と言いならわしているけれども、様式から見れば本書の「足利持氏血書造像記」のほうが妥当であろう。このように本書には旧説にこだわらず自説を開陳している場合が多く、これがまた一特色となっている。

以上読後の感想を述べたのであるが、本書は、斯学を経験豊かな博士が、金石文・典籍・記録・古文書等の中から代表的事例を適宜選択して解説を加え、簡潔明快に編集した写真集であって、古文書の手堅い教材あるいは入門書として安心して使用できる書物であるとともに、村田博士の堅実な学風の一端を窺いうる好著として広く江湖に推薦できるものである。

(続群書類従完成会発行、B5版・写真五六点・釈文解説一八頁、定価千九百円)
(東京大学史料編纂所教授)